

利 用 者 の た め に

I 農林業センサスの沿革

センサスとは、通常、調査対象のすべてについて調査票を用い、基本的な項目に係る調査を行うことを意味する。

これに対し、個々の調査対象に当たることなく、既存の資料及び情報を基に、市町村などが所定の様式により申告したものを積み上げ、統計を作成する方法を表式調査という。農林業統計でセンサス方式を初めて採用したのは、昭和4年に万国農事協会の提唱に沿って行った農業調査である。しかし、その調査は田畑別、自小作別耕地面積を調査しただけで農家や農業に関する全般的な調査を行ったわけではなかった。したがって、それを最初の農業センサスとはいいがたい。その意味で最初の農業センサスは、昭和13年に行われた農家一斉調査であるといえる。その後、この農家一斉調査の経験を基に、それまでの表式調査を改め、昭和16年から農林水産業基本調査要綱に基づく農業基本調査（夏期調査及び冬期調査）をセンサス方式で行うこととなった。しかし、第2次世界大戦末期にはセンサス方式の調査の実施が不可能となり、昭和19年には表式調査に逆戻りし、昭和20年には調査そのものが行われなかった。

戦後、センサス方式の調査として、農家人口調査（昭和21年）、臨時農業センサス（昭和22年。このとき初めて「センサス」という言

葉が用いられた。）及び農地統計調査（昭和24年）が実施された。昭和25年に至って国際連合食糧農業機関（F A O）が世界的規模で提唱した1950年世界農業センサスに参加し、我が国における農業センサスの基礎が固まった。その後10年ごとに世界農業センサスに参加するとともに、その中間年次に、我が国独自の農業センサスを実施することとなった。

また、林業センサスは昭和35年から農林業センサスの一環として10年ごとに実施されている。

今回の2000年世界農林業センサスは、戦後11回目の農業センサスであり、林業センサスとしては5回目である。

また、沖縄県においては琉球政府時代の昭和26年2月に第1回目の農業センサスが実施され、その後、昭和39年4月、昭和46年10月と2回実施されており、今回センサスは復帰後では1975年農業センサスから6回目、戦後では9回目の農業センサスであり、林業センサスとしては1980年世界農林業センサスから3回目となっている。

II 2000年世界農林業センサスの概要

1 調査の目的

2000年世界農林業センサスは、我が国農林業の生産構造、農業・林業生産の基礎となる諸条件等を総合的に把握することによって、農林業の基本構造の現状と動向を明らかにし、農林業施策及び農林業に関して行う諸統計調査に必要な基礎資料を整備することを目的に実施したものである。

2 根拠法規

統計法（昭和22年法律第18号）、統計法施行令（昭和24年政令第130号）及び農林業センサス規則（昭和44年農林省令第39号）に基づいて行った。

3 調査の体系

調査体系は、次のとおりである。

なお、調査の企画・設計はすべて農林水産省大臣官房統計情報部で行った。

調査の種類		調査対象	調査組織	調査期日	調査方法
農業事業体 調査	農家調査	農家の全数	農林水産省－都道府県－市区町村－指導員－調査員	平成12年2月1日 (沖縄県は平成11年12月1日)	調査客体の自計申告調査
	農家以外の農業事業体調査	協業経営体、会社等の全数	農林水産省－都道府県－市区町村－指導員	同上	同上
農業サービス事業体調査		農業サービス事業体の全数	農林水産省－地方農政局－統計情報事務所－同出張所	同上	同上
農業集落調査		農業集落の全数	同上	同上	出張所職員が農業集落の精通者に面接する聞き取り調査
林業事業体 調査	林家調査	林家の全数	農林水産省－都道府県－市区町村－指導員－調査員	同上	調査客体の自計申告調査
	林家以外の林業事業体調査	会社等の全数	農林水産省－都道府県－市区町村－指導員	同上	同上
林業サービス事業体等調査		林業サービス事業体等の全数	農林水産省－地方農政局－統計情報事務所－同出張所	同上	同上
林業地域調査		林業地域の全数	同上	平成12年8月1日	都道府県の自計申告、出張所職員の面接聞き取り及び林野庁行政記録の活用

4 調査の対象地域の範囲

調査対象の範囲は、全国とした。

III 用語の解説と利用上の注意

2000年世界農林業センサスの変更点

2000年世界農林業センサスの実施に当たっては、調査客体の負担軽減、農業情勢の変化等を踏まえ、次の変更を行った。このため、一部の調査項目において、1995年農業センサスまでの結果と直接比較ができないものがあるので、データの利用に当たっては十分留意されたい。

1 自給的農家の調査項目を簡素化

調査客体の負担軽減を図るため、自給的農家に係る調査項目を大幅に簡素化し、農家世帯員及び土地面積といった、資源総量を把握するための基本的な項目に限定した。

このため、1995年農業センサスまでは、自給的農家と販売農家を合わせた総農家の統計データが公表されているが、2000年世界農林業センサスでは、総農家に関する統計データは農家の世帯員数、経営耕地面積（貸借面積及び耕作放棄地面積を含む。）などに限られている。

2 農業経営者、農業後継者の概念を導入

農業経営の視点で、販売農家の農業構造を明らかにするため、1995年まで用いていた世帯主（家としての経済的責任者）及びあとつぎ（次の代でその家を継ぐ者）の概念から、2000年世界農林業センサスでは、農業経営者（農業経営の責任者）及び農業後継者（次の代で農業経営を継承する者（予定者を含む。））の概念を導入した。

農業経営者とは、当該農家の農業経営に責任を持つ者をいい、農作業に従事せず作業等の指示を行うだけの者も含めた。

ただし、親が稲作経営、子が施設園芸を行っているような場合など、実際は一つの農家で複数の農業経営者がいる場合であっても、便宜上いずれか1人を農業経営者とした。

3 商品生産を行う農業事業体に着目した作付面積等の項目設定

調査客体の負担軽減及び調査の簡素化を図るため、農作物の作付（栽培）面積及び家畜の飼養頭羽数については、商品生産を行う事業体について農業構造を明らかにする観点から、販売を目的とするものに限定した調査とした。

なお、1995年農業センサスまでは、自給用も含むすべての面積及び飼養頭羽数を調査していた。

また、農作物については1995年まで収穫面積の調査を行っていた。しかしながら、収穫時点では被害等により作付けしたが収穫できなかった場合など、当該農家が何を作ったかを把握できず、作物別の農業構造を明らかにすることができないため、2000年世界農林業センサスでは、収穫面積ではなく作付面積による調査とした。

1 表側分類の説明

本報告書の表側分類に用いている農家分類については、「販売農家」を対象に分類している。

なお、「販売農家」とは経営耕地面積30a以上又は農産物販売金額50万円以上の農家のことである。

(1) 経営耕地面積規模別分類とは、農業の基本的な生産手段である経営耕地面積を分類基準にした農家分類である。

経営耕地面積は、農業経営規模の大小を表現する代表的な指標であり、この分類は最も基本的な農家分類として戦前の農事統計以来の長い伝統をもっている。規模の大小を表すのに経営耕地面積を用いるのは、機械投入などの資本投下や収穫量など、経営規模の大きさが一般的に耕地面積の規模に比例しており、しかも調査把握が比較的容易であるからである。ただし、この分類には経営組織や資本集約度の差異が含まれていないので経営規模の総体を反映するには限界がある。

(2) 主副業別分類とは、農家の性格分類の中で特に農業の担い手農家を明らかにすることを目的に分類したものである。

具体的には、農業所得の依存度と農業の担い手確保の程度との組み合わせにより、農業の担い手としての農家層から兼業への依存度が高く、担い手もいない農家層にかけて「主業農家」、「準主業農家」、「副業的農家」に3分類している。

ア 主業農家とは、農業所得が主（農家所得の50%以上が農業所得）で、65歳未満

の自営農業従事60日以上の子帯員がいる農家をいう。

主業農家のうち、「65歳未満の農業専従者がいる」とは、65歳未満の自営農業従事150日以上の子帯員がいる農家をいう。

イ 準主業農家とは、農外所得が主（農家所得の50%未満が農業所得）で、65歳未満の自営農業従事60日以上の子帯員がいる農家をいう。

ウ 副業的農家とは、65歳未満の自営農業従事60日以上の子帯員がいない農家をいう。

また、調査期日前1年間に農産物を販売しなかった等、農業所得のない農家については、農外所得との比較ができないため、副業的農家に分類した。

(3) 農産物販売金額規模別分類とは、農業生産の結果としての農産物販売の規模を分類基準とした経営規模分類である。

この分類は、土地面積依存度の少ない施設園芸、中小家畜生産等の施設型農業の発展により、経営耕地規模だけでは経営規模の指標としては不十分になってきたので、これを補完する分類として採用された。

一方、この分類は経営部門間の所得率の差異を反映しておらず、農業所得形成力を表す指標としては有効でないという面を有している。また、調査技術的な観点からみて過少申告の影響があることや、貨幣価値で表示されるため農産物価格の変動により、時系列による累年比較がしにくいことなどの不便さを伴う。

従って、この分類は商品生産型農業の進展と農産物市場とのかかわり合い等、横断的な分析に活用すると有効である。

なお、農産物販売金額とは、調査期日前1年間の農産物販売金額（経費を差し引かない販売粗収入のこと。自給部分の見積金額は含まない。）の合計である。

- (4) 農業経営組織別分類とは、農家ごとの農業経営の部門構成によって経営タイプを分類したものである。農家がいかなる農業部門を中心に経営しているか、どのような部門の組み合わせを行っているかを明らかにすることは農業の発展方向を知る上で重要である。

具体的な組織分類方法は、まず農産物販売金額1位の部門が総販売金額の8割以上を占める農家を単一経営農家とし、8割未満の農家を複合経営農家と規定している。

本報告書では、後者をさらに区分して6割以上8割未満の農家を準単一複合経営農家、6割未満の農家を複合経営農家に分類している。

単一経営農家は各農作物部門ごとに2次分類され、稲作単一経営、酪農単一経営などとしている。なお、1995年農業センサスから近年生産が増加している「花き・花木」を独立した部門として表章するとともに、「施設園芸」を「施設野菜」、「果樹類」及び「花き・花木」にそれぞれ振り分けて表章することとした。

- (5) 農業労働力保有状態別分類とは、農業経営の担い手がどのような労働力によって支えられているかを明らかにするため、農業労働力の視点において分類したものである。この分類は、農業専従者（農業従事者のうち、年間150日以上自営農業に従事した世帯員。）の有無によって、その農業経営の活力

を探ろうとするものであって、「専従者あり」、「専従者なし」に2区分している。このうち農業専従者ありの区分に関し、農業労働力保有規模をより明確にするため、男子専従者と女子専従者の保有の有無を組み合わせ、「男女の専従者がいる」、「専従者は男子だけ」、「専従者は女子だけ」に3区分している。

- (6) 農業投下労働規模別分類とは、農業経営に投下された総労働量（世帯員、雇用労働、手伝い等の合計）を標準化した値で比較するため、2000年世界農林業センサスから採用したものである。

具体的には年間農業労働時間1,800時間（1日8時間換算で225日）を1単位の農業労働単位とし、農業経営に投下された総労働日数を225日で除した値により分類を行った。

総労働日数は、世帯員の自営農業従事日数と農業雇用、手間替え・ゆい、手伝いによる雇用日数等を合計したものである。

従事日数をグレードで調査したものは、各グレードの中位数（例えば「1～29日」ならば15日、「30～59日」ならば45日など。）を用いて計算している。なお、便宜上250日以上のグレードは300日、常雇については、250日とした。

- (7) 専業別分類とは、経営規模分類と並ぶ基本的分類であるが、元々、農民層の分化・分解の様子を農家世帯員の農業外への就労の側面から観察しようとした問題意識に立脚したものであり、「家ぐるみの農業経済」を前提にした分類である。

現在用いられている分類は、家の経済を

担う世帯主の農業を中心とした就業状態及び従事している兼業の種類を基準としたものである。

これは、農家の兼業移行の様子を的確に把握するためには、最近における労働力構成や就業状態を区分し、農業従事の程度を明らかにする必要があるからである。また、兼業を主体とする第2種兼業農家については、特に世帯主の兼業種類を区分し、その安定性を把握することが必要なためである。

ただ、現行の専兼業別分類については、大規模農家でも世帯員の誰かが他産業に勤めていれば兼業となること、小規模農家でも高齢者のみの世帯で農業のみに従事していれば専業となることなどから、専兼業別分類の統計利用に当たっては十分留意する必要がある。

ア 専業農家とは、世帯員の中に兼業従事者がいない農家をいう。

専業農家のうち、「男子生産年齢人口のいる世帯」とは、15～64歳の男の世帯員のいる世帯のことであり、「男子生産年齢人口のいない世帯」とは、同世帯員のいない世帯である。

専業農家のうち、「男子生産年齢人口のいる世帯」と「男子生産年齢人口のいない世帯」では経営内容に著しい格差があるので、専業農家の統計利用に当たっては十分留意する必要がある。

イ 兼業農家とは、世帯員の中に兼業従事者が1人以上いる農家をいう。

第1種兼業農家とは農業を主とする兼業農家、第2種兼業農家とは農業を従とする兼業農家をいう。この場合の主従は

家としていずれの所得が多いかによって定めることとしている。

ウ ここでいう兼業従事者とは、調査期日前1年間に30日以上他に雇用されて仕事に従事した者（1960年世界農林業センサスは年間30日以上という規定でなく、年間収入が1万円以上となっていた。）又は調査期日前1年間の販売金額が15万円以上（1960年世界農林業センサスは1万円以上、1965年農業センサスは2万円以上、1970年世界農林業センサスは3万円以上、1975年農業センサスは5万円以上、1980年世界農林業センサスは7万円以上、1985年農業センサス及び1990年世界農林業センサスは10万円以上、1995年農業センサスは15万円以上）ある農業以外の自営業に従事した者のことである。

エ 兼業農家のうち世帯主農業主とは、調査期日前1年間に農業に150日以上従事した世帯主がいる農家又は兼業に従事した世帯主のうち農業が主の農家をいう。

世帯主兼業主とは、兼業に従事した世帯主のうち兼業が主の農家をいう。

恒常的勤務とは、決まった勤務先に事務員、教員、工員などとして勤めた世帯主がいる農家をいう。出稼ぎとは、通勤できないため自宅以外の場所に寝泊まりし、臨時的に雇われて働く世帯主がいる農家をいう。日雇・臨時雇とは、通勤で臨時的に雇われて働く世帯主がいる農家をいう。

なお、1970年世界農林業センサス及び1975年農業センサスは兼業の種類別区分を「世帯主」と「あとつぎ」の兼業従事

を主体に分類し、1980年世界農林業センサス、1985年農業センサス及び1990年世界農林業センサスは世帯主の農業を中心とした就業状態及び従事している兼業の種類を基準に分類することによって、兼業農家のうちから専業的農家を区分していたが、1995年農業センサスからは、第2種兼業農家の恒常的勤務の割合が高くなってきたことから、「世帯主農業専従」と「世帯主兼業の農業主」を統合し、「世帯主農業主」とした。

2 農 家

- (1) 農家とは、平成12年2月1日（沖縄県は、平成11年12月1日）現在の経営耕地面積が10a以上の農業を営む世帯及び経営耕地面積がこの規定に達しないか全くないものでも、調査期日前1年間に於ける農産物販売金額が15万円以上あった世帯（これを「例外規定農家」という。1960年世界農林業センサスでは2万円以上、1965年農業センサスでは3万円以上、1970年世界農林業センサスでは5万円以上、1975年農業センサスでは7万円以上、1980年世界農林業センサス及び1985年農業センサスでは10万円以上、1990年世界農林業センサス及び1995年農業センサスでは15万円以上）をいう。

また、1990年世界農林業センサスから、調査農家を販売農家（経営耕地面積30a以上又は農産物販売金額50万円以上）と自給的農家（経営耕地面積30a未満かつ農産物販売金額50万円未満）に区分した。

- (2) 農業を営むとは、営利又は自家消費のため耕種、養蚕、養畜又は自家生産の農産物

を原料とする加工を行うことをいう。

3 経営耕地

- (1) 経営耕地とは、調査期日現在で農家が経営している耕地をいい、自家で所有し耕作している耕地（自作地）と、よそから借りて耕作している耕地（借入耕地）の合計である。土地台帳上の地目や面積に関係なく、実際の地目別の面積とした。

- (2) 経営耕地とするかどうかについては次によった。

ア よそから借りている耕地は、届出の有無に関係なく、また、口頭の貸借契約によるものも、すべて借り受けている農家の経営耕地（借入耕地）とした。

イ 請負耕作や委託耕作などと呼ばれるものであっても、実際は一般の借入れと同じと考えられる場合は、その耕地を借り受けて耕作している農家の経営耕地（借入耕地）とした。

ウ 耕起又は稲刈り等のそれぞれの作業を単位として、作業を請け負う組織に委託している場合は、その耕地は委託者の経営耕地とした。

エ 委託者が、収穫物のすべてをもらい受ける契約で、作物の栽培一切を人に任せ、そのかわりあらかじめ決めてある一定の耕作料を相手に支払う場合は、その耕地は委託者の経営耕地とした。

オ 調査期日前1年間に2作以上した耕地であって、うち1作だけの期間を人に貸し付けたものは、貸し付けた側の経営耕地とした。

調査期日前1年間に1作しかしなかつ

た耕地で、その1作の期間を人に貸し付けていた場合は、貸し付けた者の経営耕地とはせず、貸付耕地とした（借り受けた側の経営耕地となる。）。なお、「また小作」している耕地も、「また小作している農家」の経営耕地（借入耕地）とした。

カ 共有の耕地を割地として各戸で耕作している場合や、河川敷、官公有地内で耕作している場合も経営耕地（借入耕地）とした。

キ 協業で経営している耕地は、自分の土地であっても、自家の経営耕地とはせず、協業経営体の経営耕地とした。

ク 他市区町村や他の都道府県に通って耕作（出作）している耕地でも、すべてその家の経営耕地とした。したがって、〇〇県や〇〇町の経営耕地面積として計上されているものは、その県や町に居住している農家が経営している経営耕地の面積であり、いわゆる属人統計であることに留意する必要がある。

(3) 耕地とみなすかどうかについては、次によった。

ア 耕地面積には、けい畔を含めた。棚田などでけい畔がかなり広い面積を占める場合には、本地面積の2割に当たる部分だけを田の面積に入れ（斜面の面積ではなく、水平面積を入れる。）、残りの部分については耕地以外の土地とし、実際の利用状況により採草していれば「採草地や放牧地」とした。

イ 災害や労力の都合などで調査期日前1年間作物を栽培していなくても、ここ数年の間に再び耕作する明確な意思のある

土地は耕地とした。しかし、調査期日前1年間以上作物を栽培せず、しかもここ数年の間に再び耕作する明確な意思のない土地は耕地とはせず耕作放棄地とした。

ウ 新しく開墾した土地は、は種できるように整地した状態になっていても、調査時点までに1回も作付けしていなければ耕地とはしなかった。

エ 宅地内でも1a以上まとまった土地に農作物を栽培している場合は耕地とした。

オ ハウス、ガラス室などの敷地は耕地とした。ただし、コンクリート床などで、地表から植物体が遮断されている場合やきのこ栽培専用のものの敷地は、耕地としなかった。

カ 普通畑に牧草を作っている場合は耕地とした。また、林野を耕起して作った牧草地（いわゆる造成草地）も耕地とした。

なお、施肥・補はんなどの肥培管理をしている牧草栽培地は、は種後何年経過していても耕地とし、肥培管理をやめていて近く更新することが確定していないものは、耕地以外の土地とした。

キ 堤防と河川・湖沼との間にある土地に作物を栽培している場合は耕地とした。

ク 植林用苗木を栽培している土地も耕地とした。

ケ 肥培管理を伴うたけのこ、くり、くるみ、山茶、こうぞ、みつまた、はぜ、こりやなぎ、油桐、あべまき、うるし、つばきなどの栽培地も耕地とした（刈敷程度は肥培管理とみなさない。）。)

(4) 田

ア 田とは、耕地のうち、水をたたえるた

めのけい畔のある土地のことをいう。

水をたたえるということは、人工かんがいによるものだけではなく、自然に耕地がかんがいされるようなものも含めた。したがって、天水田、湧水田なども田とした。

(7) 陸田（もとは畑であったが、現在はけい畔をつくり水をたたえるようにしてある土地や、湛水のためビニールを張り水稻を作っている土地）も田とした。

(イ) ただし、もとは田であってけい畔が残っていても、果樹・桑・茶など永年性の木本性周年植物を栽培している耕地は田とせず樹園地とした。また、同様にさとうきびを栽培していれば普通畑とした。

なお、水をたたえるためのけい畔をつくらず畑地にかんがいでいる土地は、たとえ水稻をつくっても畑とした。

イ 稲を作った田とは、水稻を作った田のことをいう。ただし、青刈り用の稲は除いた。

ウ 過去1年間に稲以外の作物だけを作った田とは、普通の畑作物や花き類、牧草のほか、わさび、せり、はす、いぐさ等を作った田のことで、緊急生産調整推進対策により稲以外の作物を作付けたものはここに含めた。また、青刈り用の稲は目的が米を収穫するものではないのでここに含めた。

エ 過去1年間に作付けしなかった田とは、災害や労力不足、転作などの理由で、過去1年間まったく作付けしなかったが、ここ数年の間に再び耕作する意思のある田のことをいう。

(5) 畑

ア 畑とは、耕地のうち田と樹園地を除いた耕地のことをいう。

イ 普通畑とは、畑のうち、牧草専用地を除くすべてのもので、通常、草本性作物又は苗木等を栽培することを常態とするものをいう。

また、焼畑、切替畑（林野で抜根せず、火入れにより作物を栽培する畑及び畑と山林を輪番し、切り換えて利用する畑）など不安定な畑も含めた。

ウ 牧草専用地とは、牧草だけを継続的に栽培している土地のことをいう。

(7) 牧草のは種後何年経過していても、施肥及び補はんなどの肥培管理をしていればここに含めた。

(イ) 草地造成により造成した牧草地を含めた（この場合の造成草地とは牧草のは種を完了したものをいう。）。ただし、共有及び公有の造成草地で割地されていないものは除いた。

エ 過去1年間に作付けしなかった畑とは、災害や労力不足などの理由で、過去1年間まったく作付けしなかったが、ここ数年の間に再び耕作する意思のある畑のことをいう。

(6) 樹園地とは、果樹、桑、茶などの木本性作物を1a以上集団的（一定のうね幅及び株間を持ち、前後左右に連続して栽培されていることをいう。）栽培するものをいい、果樹園、茶園、その他の樹園地（桑園、たけのこを栽培している竹林など）とした。

(7) 耕地の面積については、ha、aを単位に調査したが、1畝は1a、1反は10a、1町

は1haと読み替えて調査票に記入することとし、そのまま集計した。このように換算係数を用いた換算を行わなかったのは、農家は経営耕地面積に関し、土地台帳上の面積を申告することが多いと考えられること等から厳密な換算をしてもあまり意味がないからである。

- (8) センサスによる経営耕地面積は実際の面積より過少になることがあると考えられるので、耕地面積の実数については標本実測調査である耕地及び作付面積統計の結果を用い、センサス結果についてはこれを実数としてそのまま用いるのではなく、市区町村における農業構造に関し、例えば耕地の利用状態別構成比、耕地利用率、耕地の集落別分布率等をみるために利用するのが望ましい。

なお、農林水産省が現在行っている耕地面積に関する標本実測調査では、旧市区町村別や農業集落別等の小地域範囲の統計はもちろん、市区町村別統計についても耕地の利用状態を細分した詳細なものを作成することは困難であるので、これらの地域間比較や年次比較等に関しては、センサスの結果が用いられることになるが、その際センサスの結果は以上のような問題を含むものであることを十分留意する必要がある。

4 世帯員

- (1) 世帯員とは、原則として住居と生計を共にしている人のことである。
- (2) 出稼ぎ、行商、入院療養等で調査期日現在その家にいなくても生計を共にしている人、その家で養っている身寄りのない老人

や子供のように世帯員との血縁又は姻戚関係がなくても一緒に住み生計を共にしている人などを含む。ただし、家族であっても、勉学や就職のためふだんよそに住み生活している人（農業研修等で1年未満の短い期間よそに出ている人は世帯員に含める。）、親戚や知人から就学などのため一定期間預かっている子弟や下宿人、住み込みの雇い人等は含めない。（1965年農業センサスまで住み込みの雇い人を含めていた。）

- (3) 農林業センサスにおける世帯員の規定は、次のように国勢調査の規定と若干異なっているので留意する必要がある。

ア 農林業センサスでは、調査期日現在出稼ぎなどで家にいない人でも、不在期間が30日以上1年未満の場合は世帯員としている。しかし、国勢調査では不在期間3か月以上にわたるような出稼ぎをしている人などは、その家の世帯員とせず、出稼ぎ先で調査することとなっている（国勢調査の手引きによる。）。

イ 農林業センサスでは、住み込みの雇い人は世帯員としないこととしているが、国勢調査では、営業のため住み込みの雇い人及び家事使用人はいずれも世帯員に含めることとなっている（国勢調査の手引きによる。）。

ウ このように両調査の規定が異なっているのは次のような理由による。

- (ア) 国勢調査の第1のねらいは、調査時点での人口を正確に把握することであるため、このように規定することがその目的達成に最も適している。

(イ) しかし、農林業センサスで世帯員を調

査する第1のねらいは、その家が専業農家であるか、あるいはどのような兼業に依存している農家かなど、農家の経済的性格を区分することにある。この目的を達成するには上記のように規定しないと、例えば、出稼ぎに依存している農家が統計上専業農家に分類されるなど実態を正確に反映しなくなる。

また、住み込みの雇い人は、世帯員の家族と住居は共にしているが、生計を共にしているとは考えられない。したがって、こうした者を世帯員に入れると、上記の場合と同様、農家の性格区分などを行うことができなくなる。

- (4) なお、1990年世界農林業センサスまでは、16歳以上をもって「生産年齢人口」としていたが、国勢調査等と比較できるように、1995年農業センサスから、15歳以上をもって「生産年齢人口」とした。

- (5) 農業経営者とは、その世帯の農業経営に責任を持つ者をいう。

なお、センサスでは、一つの世帯に複数の農業経営者がいる場合は、便宜的にいずれか1人を農業経営者とした。

経営構成員とは、農業経営者以外で農業に30日以上従事する世帯員及び他出の農業後継者をいう。

農業後継者とは、次の代で親の農業経営を継承することが確認されている者（予定者を含む。）をいう。

あとつぎとは、次の代で家を継承する予定の者をいう。

5 就業状態の区分

- (1) 15歳以上の世帯員について、調査期日前1年間の就業の実績により就業状態を区分したものである。
- (2) 国勢調査では、調査期日前1週間、労働力調査では毎月末1週間の就業の実績により区分することを原則としているが、農家世帯員の就業は季節的な変化が著しく、特に2月1日（沖縄県では、12月1日）前1週間の実績に基づいて区分したのでは、農家世帯員の就業の実態にほど遠いものとなるので、調査期日前1年間の実績に基づくこととしている。
- (3) 就業状態の区分は、調査期日前1年間の農業とその他の仕事についての従事状況と、ふだんの主な状態の組合わせによった。

6 農業労働力

- (1) 農業従事者（農業に従事した世帯員）とは、15歳以上の世帯員のうち、調査期日前1年間に少しでも自営農業に従事した者のことである。
- (2) 自営農業とは、自家農業（自家で経営している農業）に農作業受託を含めたものをいい、1990年世界農林業センサスから用いられている概念である。
- (3) 農業就業人口（自営農業に主として従事した世帯員）とは、15歳以上の農家世帯員のうち、農業のみに従事した人又は農業とその他の仕事の両方に従事した人のうち、農業が主の人のことである。したがって、年間農業にわずかしから従事していない者でも、兼業従事日数より多ければここに計上

されているので留意する必要がある。

- (4) 基幹的農業従事者（自営農業に主として従事した世帯員のうち、仕事の主の人）とは、農業就業人口のうち、ふだんの主な状態（下記(5)参照）が「主に仕事」に該当した人のことである。したがって、ふだん仕事として主に農業に従事している人ということになる。

なお、1960年世界農林業センサスでは「基幹的農業労働力」、1965年農業センサスでは「仕事を主とする農業就業人口」と表示しているもののことである。

(参考) 世帯員の就業状態区分

		仕事への従事状況				
		農業 のみに 従事	農業とその他の 仕事の両方に 従事		その他 の仕事 のみに 従事	仕事に 従事し なかつ た
			農業 が主	その他 の仕事 が主		
ふだんの 主な状態	主に 仕事	C A B				
	主に 家事や 育児					
	その他					

- A 農業従事者
B 農業就業人口
C 基幹的農業従事者

- (5) ふだんの主な状態は、調査期日前1年間における生活の主な状態によって、①主に仕事、②主に家事や育児、③その他に区分した。「その他」には、通学を主としていた人、病気やけがで療養中のため何もしないでいた人、老人などで少しは家事や仕事もするが大部分の時間そうした労働はしない

でいた人、失業して家にいる人などを含む。役職に就いて、ふだんはそのことで活動していても、その役職が収入を目的としないものであれば「その他」に含めた。

- (6) 「基幹的農業従事者」は以上のような区分によるものであるので、年間の自営農業従事日数が60日に満たないようなわずかなものは例外的にしか計上されないことになる。
- (7) 「基幹的農業従事者」の人数はもちろん、「農業就業人口」を農業労働力の総量と考えることは適切ではないのでこの点にも留意する必要がある。

農業従事者については、主として兼業に従事しながら農業にも従事する者（すなわち、農業以外の仕事を主とする者）が相当な比重を占めるようになってきて、農業労働力量に関する統計として無視できなくなっていることから、分類しているものである。

7 作物、畜産

- (1) 販売目的の作物の作付面積とは、販売を目的として作付けした面積であり、自給用のみを作付けた場合は含めない（販売目的で作付けしたものを、たまたま一部自給向けにしたものは含めた。）。
- (2) 家畜の飼養頭羽数は、調査期日現在のものであり、ブロイラーの出荷羽数は調査期日前1年間のものである。
- (3) 1995年農業センサスまでは、自給分を含めた収穫面積についての結果であるため、2000年世界農林業センサス結果とは直接比較できないので留意する必要がある。

8 農業雇用労働

(1) 常雇とは、主として自営の農作業のために雇った人で雇用契約（口頭の契約でもよい。）に際し、あらかじめ7か月以上の期間を定めて雇った人のことである。

なお、住み込み及び通勤の双方を含む。

(2) 農業臨時雇とは、農業雇用労働のうち常雇以外のもので、農業季節雇、農業日雇などのことである。農作業をよそに請け負わせた場合の労働は含まない（農作業請け負わせというのは、一定量の作業のすべてを人に任せ、その対価として、例えば10a当たりいくらかという形で料金を支払うような場合のことである。）。

(3) 手間替え・ゆいとは、農家相互間で等価交換を原則としているすべての労力交換のことである。労力を交換して、その過不足を現金や物品で清算したような場合、機械耕作をしてやった代わりにその分を手間で返してもらった場合、共同田植・共同防除などの共同作業を互いに行う場合などを含む。

(4) 手伝いとは、金品の授受を伴わない無償の受け入れ労働のことである。

9 農業生産組織

(1) 機械・施設の共同利用組織とは、農業の生産過程の一部で使用する機械や施設等の利用についての申し合わせにより、農家が相互に結びついている組織をいう。しかし、これらのうち、形式的には農業生産組織の形をとっていても実質的に個別農家で行っているような名目的なものは除かれている。

(2) 農作業の受託組織とは、農作業の全部又は一部分を受託し、一定の作業料金を収受している組織をいう。

なお、「機械・施設の共同利用組織」が、農作業等を受託するような場合は、この「農作業の受託組織」にも含めている。

10 請負作業

(1) 農作業をよそに請け負わせた農家数は、水稻作の作業のすべて又は育苗、耕起・代かき、田植、防除、稲刈り・脱穀及び乾燥・調製の6つの作業並びに水稻作以外の作業について、賃作業や請負作業に出したものについて調査したものである。

(2) よその農作業を請け負った農家数と請負面積は、個人（相対で、又はあつ旋を受けて）として及び受託組織などの仕事で請け負い作業を行ったものである。

この場合、農協や受託組織などにオペレータ等として雇われ、機械作業に従事しただけというものは含まない。

11 契約生産

契約生産とは、あらかじめ特定の者（スーパー等小売店を含む。）と売買契約をして農業生産を行っているものをいう。

なお、農協への出荷やたばこの契約生産は除いた。

12 環境保全型農業

環境保全型農業とは、農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和に留意しつつ、土づくり等を通じて、化学肥料、農薬の使用等による環境負荷の軽減に配慮した持続的な

農業をいう。

13 認定農業者

認定農業者とは、農業経営基盤強化促進法（昭和55年法律第65号）に基づく農業経営改善計画の認定を市区町村長から受けている農業者をいう。

14 添付CD-ROMについて

本書には、巻末に本書に掲載した統計表のファイルを収録したCD-ROMが添付してあるので、データの加工等に利用されたい。

なお、CD-ROMの利用方法については、CD-ROMに収録されている、readme.txtを参照されたい。

連絡先：農林水産省大臣官房統計情報部

構造統計課 農林業センサス統計班

電話：(03) 3502-8111 内線2642、2643

(03) 3591-4603（直通）



統計はあなたの暮らしに活きている